

# 『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

けいざん  
瑩山禅師

平成28年10月第3週放送

曹洞宗大本山總持寺を開かれた瑩山禅師は、鎌倉時代の中頃、今の福井県、越前の国の多禰というところでお生まれになりました。観音様を深く信仰するお祖母様とお母様のもとで育ち、石を積んで宝塔を建てたり、土を粘土の様にして仏像を作ったりして遊び、早くも六歳の頃には出家の志をおこしたといわれています。

しかし、なかなか出家は許されず、十七歳でようやく永平寺の懷 舜禅師の最後の弟子として正式に僧侶となり、名を幼名である行生から紹瑾に改めます。

それから間もなくして諸国行脚の旅に出て、越前の宝慶寺で修行をし、京都で臨濟の禅を、比叡山で天台の教 学を学ばれて越前に戻られています。

それは、かつて道元禅師が正しく伝えられた仏の道を求めて広く学ばれた、道を求める心をなぞらえているかのようでもありましょう。

その志は更に膨らみ、瑩山禅師は二十八歳で四国、今の徳島県、阿波の城満寺の住職となり、「授戒会」を開いて多くの一般の方々を仏教徒にする儀式を行い、教えの縁を結ばれて仏道に導きました。

三十五歳で今の石川県、加賀の大乗寺の住職となり、その二年後からは、お釈迦さまから曹洞宗第二祖である懷 舜禅師までの伝記である『伝光録』をお示しになります。

その頃、瑩山禅師のもとには優れた修行僧が多く集まり、曹洞宗の教えが広まる土台ができました。

そして、五十歳で今の石川県、能登に永光寺を開き、『坐禅用心記』を著され、五十八歳の時に諸嶽寺を寄進されると禅宗の寺院にあらため、總持寺と名付けられました。總持寺の伽藍が調うと、弟子の峨山禅師に後を譲られます。

その後、瑩山禅師は亡くなりますが、そのご生涯は、道元禅師の教えを広く多くの人々に伝える基礎を築くものでした。後に道元禅師と並び、“常 済 大師”と呼ばれ、“太祖様”と親しまれるゆえんです。

今から八年後の平成三十六年には、瑩山禅師七百回忌の「大遠忌」を迎えます。あらためて、永きにわたる教えが今あることに思いを致し、道を求める心の大切さを、瑩山禅師に今一度学びたいものです。

— 終 —